

二世帯住宅

40周年 HEBEL
HAUS

二世帯住宅 40 周年記念シンポジウム

二世帯住宅の変遷に見る
親子の住まい方と
今後の展望

講演とパネルディスカッションの記録

旭化成ホームズ株式会社

くらしノベーション研究所

二世帯住宅研究所

二世帯住宅 40 周年記念シンポジウム

二世帯住宅の変遷にみる親子の住まい方と今後の展望

日時： 2015 年 10 月 27 日(火) 18:00~20:20 (17:30 開場)

場所：東京都新宿区西新宿 1-24-1 エステック情報ビル9階
旭化成ホームズ(株)ファミリーホール AB

目的：

1975 年に旭化成ホームズが初めて商品発売した「二世帯住宅」について、誕生から現在までの社会的背景や今後の展望について学識経験者を交えて討議し、「二世帯住宅」という住まい方とその可能性についての理解を深め、当該分野の研究促進に貢献すること。

スケジュール：

18:00~【趣旨説明・講師紹介】(10分)

18:10~【パネリスト講演】(各20分)

1. 二世帯住宅 誕生前後を思い起こして — 二世帯住宅開発者：矢永晶
2. 二世帯住宅 現在までの展開 — 二世帯住宅研究所長：松本吉彦
3. 「大きな家」の持つ可能性 — 日本女子大学教授：篠原聡子

19:10~【休憩】(15分)

19:25~【パネルディスカッション】(55分)

コメンテーター：明治大学専任講師：南後由和

司会：東京大学教授 大月敏雄

20:20 【終了予定】

【パネリスト】(登壇順)

矢永 晶 (やなが あきら)

元・旭化成設計(株) 社長 二世帯住宅の開発者

1964年 熊本大学工学部建築学科卒業、同年 旭化成工業(当時)入社。

- ・住宅事業の創業期から一貫して住宅事業に携わり、ヘーベルハウスのプロトタイプを開発。
- ・二世帯住宅の開発を提案(1973)、二世帯住宅の商品化(1975年)や二世帯住宅研究所設立(1980年)に携わる。
- ・設計総括室 室長、旭化成ホームズ(株) 取締役、同社 監査役を経て、旭化成設計(株) 社長に就任。2005年 退社。

主な著書に、『高齢化社会の住宅』(共著：一粒社)など。

現在、全日本美術協会 理事、日本美術家連盟会員。



松本 吉彦 (まつもと よしひこ)

旭化成ホームズ(株) 二世帯住宅研究所 所長

1983年 東京大学工学部建築学科卒業、同年 旭化成工業(当時)入社。

1996年 英国マンチェスター大学芸術学部都市計画景観学科修士コース修了(MA)。

2003年～2004年 日本女子大学 非常勤講師、

2013年～ 東京工業大学 非常勤講師。

主な著書に、

『二世帯住宅という選択 実例に見る同居の家族』(平凡社)、

『近居-少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか』(共著：学芸出版社)など。



篠原 聡子 (しのはら さとこ)

日本女子大学 家政学部住居学科 教授

1981年 日本女子大学家政学部住居学科卒業

1983年 日本女子大学大学院修了

1983年～1985年 香山アトリエ

1986年 空間研究所 設立

2001年 日本女子大学家政学部住居学科 助教授を経て、

2010年より現職。

2014年 シェアハウス『SHARE yaraicho』にて「日本建築学会賞(作品)」を受賞。

主な著書に、

『多縁社会 自分で選んだ縁で生きていく。』(共著：東洋経済新報社)など。



【コメンテーター】

南後 由和 (なんご よしかず)

明治大学 情報コミュニケーション学部 専任講師

2008年 東京大学大学院学際情報学府博士課程 単位取得退学。
2008年 東京大学大学院情報学環 助教を経て、
2012年より現職。
2014年～ 日本建築学会 編集委員会 委員。

主な著書に、
『建築の際』（編著：平凡社）、
『文化人とは何か?』（共編著：東京書籍）、『メタポリズムの未来都市展』
（分担執筆：新建築社）など。

専門は、社会学、都市・建築論。



【パネルディスカッション司会】

大月 敏雄 (おおつき としお)

東京大学 大学院 工学系研究科建築学専攻 教授

1991年 東京大学工学部建築学科卒業
1996年 同大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。
1997年 横浜国立大学工学部建設学科助手、博士（工学）取得。
2003年 東京理科大学工学部建築学科 助教授を経て、
2014年より現職。

主な著書に、
『近居-少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか』（編著：
学芸出版社）、『2030年超高齢未来』（分担執筆：東洋経済新報社）、『集合住宅の時間』（王国社）など。



二世帯住宅40周年記念シンポジウム

二世帯住宅
40周年
HEBEL

二世帯住宅の 変遷にみる 親子の住まい方と 今後の展望

主催：旭化成ホームズ(株) 二世帯住宅研究所

「二世帯住宅」は、1975年に旭化成が住宅業界で初めて提案しました。親子同居は生活一体が当たり前だった時代に、生活空間を分けた独立性の高い住まいが支持され、次第に定着。近年では、共働き、子育て、在宅介護等に対応する親子協力ネットワークの器として、あるいは単身者も共に住む「2.5世帯住宅」のような集居のかたちとして多様な発展形が提案されています。また、シェアハウスや高齢者グループホームのような、他人が集まって住むかたちとの類似性も見られるようになりました。本シンポジウムでは、40周年の機会に「二世帯住宅」という住まいの発展経緯を振り返り、今後の展望についてパネルディスカッションを行います。

■ 司会

大月 敏雄

(東京大学 大学院 工学系研究科建築学専攻 教授)

■ パネリスト

篠原 聡子

(日本女子大学 家政学部住居学科 教授)

矢永 晶

(元・旭化成設計㈱ 社長 二世帯住宅の開発者)

松本 吉彦

(旭化成ホームズ(株) 二世帯住宅研究所 所長)

■ コメンテーター

南後 由和

(明治大学 情報コミュニケーション学部 専任講師)

2015年

10月27日 火

18:00～20:20

エステック情報ビル9階

旭化成ホームズ(株)内 ファミリーホール

東京都新宿区西新宿1-24-1

(新宿駅西口より徒歩 5分)

先着100名
参加費無料
10/22(木)締切

申込
方法

「氏名」「所属」を明記の上、旭化成ホームズ(株)二世帯住宅研究所宛にメールにてお申込みください。

* 申込時のメールタイトルは「二世帯住宅40周年記念シンポジウム申込」としてください。

* その他お問い合わせは、旭化成ホームズ(株)二世帯住宅研究所：井村までお願い致します。

nisetai@om.asahi-kasei.co.jp (TEL:03-3344-7045/FAX:03-3344-7149)

目次

【趣旨説明・パネリスト講演】----- 9

1. 趣旨説明-----二世帯住宅研究所長：松本吉彦
2. 二世帯住宅 誕生前後を思い起こして--- 二世帯住宅開発者：矢永晶
3. 二世帯住宅 現在までの展開-----二世帯住宅研究所長：松本吉彦
4. 「大きな家」の持つ可能性 -----日本女子大学教授：篠原聡子

【パネルディスカッション】-----19

1. 社会学の視点から二世帯住宅の論点を探る
2. 論点1：商品でありながら公共に貢献する二世帯
3. 論点2：単身者として0.5世帯が居ることの可能性
4. 論点3：「シェア」することによる新しい空間像
5. 生活を分けた二世帯住宅で嫁姑問題を解決を目指す
6. 建築学の範囲だけで考えず他の分野に学ぶ
7. 商品というパッケージで社会へメッセージを届ける
8. 情報メディアの進化が家族と住まいを変えている
9. 家族と他人の違いは社会からの眼と財産継承
10. 家族同居とシェアハウスが共に必要とされる時代
11. 親世帯が戦後教育世代となり嫁姑問題が解消
12. 世界の中での二世帯住宅の意味を考える

【当日配布資料】-----33

(参考) 二世帯住宅研究所の主な活動報告

- 1973 二世帯住宅開発の提案
- 1975 「ヘーベルハウス 二世帯シリーズ」発売
- 1979 二世帯住宅研究会 設立、日本女子大学との共同研究開始
- 1980 二世帯住宅研究所 設立

■ 研究所報

- 1981～1998 二世帯住宅研究所報 「二重奏」 創刊号～第 65 号

■ 親子同居と住まい方のシンポジウム

- 1980 第 1 回 親子同居と住まい方はどうあるべきか - 今後の二世帯住宅
- 1981 第 2 回 今後の二世帯住宅
- 1982 第 3 回 「西の家族・東の家族」 - 東京・大阪 同居家族調査の概要
- 1984 第 4 回 「家族そして親子同居」 - その現状と課題
- 1985 第 5 回 時間の経過と世代間コミュニケーション
- 1986 第 6 回 息子夫婦同居・娘夫婦同居 その違いと住まい方提案
- 1987 第 7 回 世代別にみる同居観の違いと住まい方提案
- 1988 第 8 回 息子夫婦同居・娘夫婦同居 その違いと住まい方提案Ⅱ
- 1989 第 9 回 「将来同居」その意識と住まい
- 1990 第 10 回 二世帯の望ましいかかわり方
- 1992 第 11 回 50 坪二世帯住宅 30 の暮らし方提案

■ 調査報告書

- 1994 長寿社会における息子夫婦同居・娘夫婦同居比較調査
- 1995 いきいきシルバーライフ～親子同居における住居形態別比較調査
- 1997 祖父母と孫の関係～居住形態による比較調査
- 1998 二世帯同居の意識変化調査 ～1994 年と 1997 年との比較
- 2002 二世帯同居型住宅の家族 20 年の軌跡
- 2005 二世帯同居・この 10 年～定点調査で振り返る同居意識と実態の変容
- 2007 親子同居スタイル・多様化の実態～二世帯住宅における独立と融合～
- 2010 二世帯同居における『孫共育』～家事育児協力のための新しい Nice Separation
- 2012 都市型親族集住 2.5 世帯同居の実態
- 2013 イマドキ親世帯の実家ネットワーク
- 2015 30 年暮らした家族による二世帯住宅の評価と住まい継承の実態
- 2015 息子夫婦・娘夫婦同居で異なる同居前不安と交流意識
～同居前不安による同居ブレーキの解消法と同居層・近居層の親子観に見る同居アクセラ

■ 書籍 (著者肩書は当時)

- 1986 親子同居・上手な住い方 文化出版局 二世帯住宅研究所編
- 1996 テクノマーケティング戦略 産能大学出版部 (副所長 熊野勲共著)
- 2013 二世帯住宅という選択 ～事例に見る同居の家族 平凡社 (所長 松本吉彦著)
- 2014 近居～少子高齢社会の住まい・地域再生にどう生かすか 学芸出版社 (所長 松本吉彦共著)

■ Web コンテンツ執筆

- 2004～現在 AllAbout 「二世帯住宅で暮らす」ガイド Web 記事配信

二世帯住宅研究所ホームページ内に調査報告書を掲載しています。
<http://www.asahi-kasei.co.jp/j-koho/kurashi/kenkyu/nisetai/index.html/>

二世帯住宅 40 周年記念シンポジウム

趣旨説明と パネリストによる講演

趣旨説明

旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所長 松本 吉彦

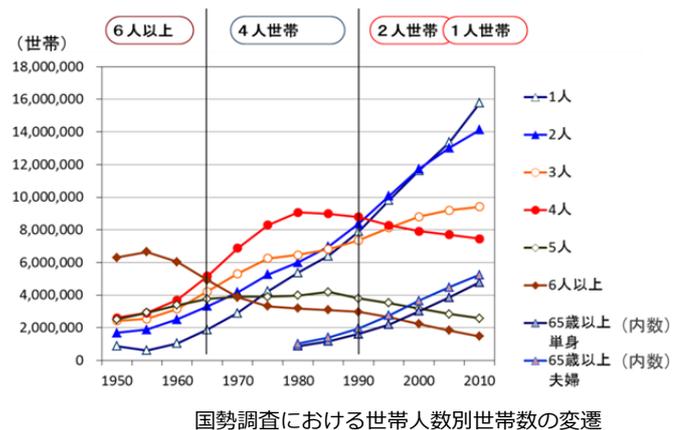
このシンポジウムは二世帯住宅を、旭化成が業界で初めて提案して40年になるのを記念して開催するものです。

まず当時の社会背景を整理します。1960年代に都市圏に人口が大量に流入し、それが70年代の大量の住宅需要へとつながっていきます。郊外ニュータウン開発等で都市は拡大し、親の住む地域と比べ通勤時間の長い、都心から遠い場所にしか家を取得できなくなっていました。

これを家族の側から、世帯人数の変遷で見ると、6人以上の世帯数が減り、4人以下が急激に増え核家族化した時代が70年代です。二世帯住宅のように生計を分け、一つの住居に住んでいる場合は例えば親世帯は2人、子世帯は4人世帯となります。つまり、二世帯住宅は生計一体の大家族での暮らしから核家族に分割されていく中で、親世帯子世帯がそれぞれ生活を分けた核家族として、一つの家に住むための形として生まれてきた訳です。

ヘーベルハウスが鉄骨の軸組にヘーベル (=ALC) 版を床、外壁に用い、床が木造に比べ遮音性に優れたALCであったため元々二世帯住宅に向いていた、ともいえるでしょう。

二世帯住宅40周年を振り返るための研究として、築30年、世代交代期を迎えた二世帯住宅の現状を調査した結果を5月に発表しました。その結果91%は二世帯同居してよかった、とお答えいただきました。このシンポジウムは二世帯住宅の誕生から現在までをレビューし、今後の二世帯住宅はどうなるのかを考える機会としたい、と思います。



1. 二世帯住宅 誕生前後を思い起こして

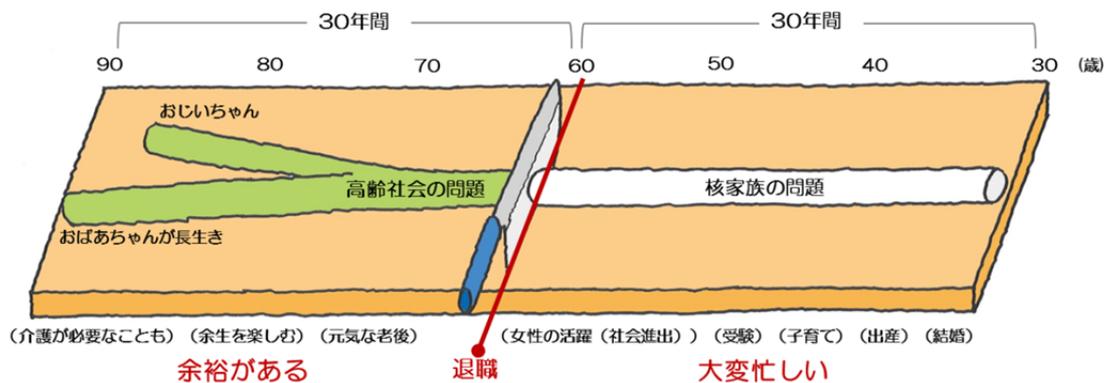
旭化成ホームズ OB 二世帯住宅の開発者 矢永 晶

二世帯住宅の初期の開発に携わった者として、もう 40 年になるのか、と感慨深いものがあります。二世帯住宅の誕生から成長する足取りについてお話をさせていただきます。

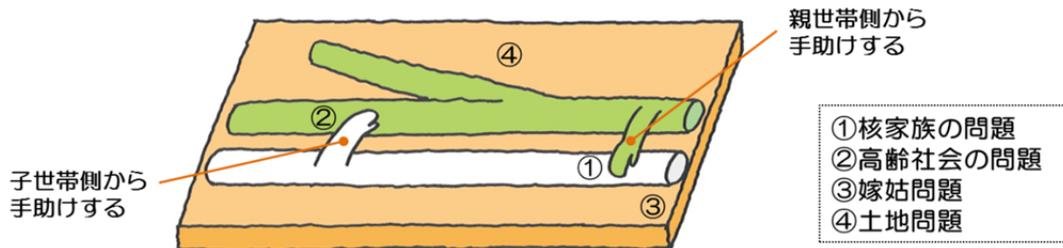


1970 年代の住宅難の時代、旭化成は住宅産業にまず基本的な建材から参入し、ドイツから導入したヘーベルの技術で高品質の住宅の供給を目指しました。しかし建材を売るのではなく、住宅の本質を捉えていく必要性を感じ、核家族化等の問題を研究しようと思いました。自身の子育て経験で親の助言の大事さを痛感しつつも、嫁姑問題を考えると昔の大家族には戻りたくない。そこでこの長ネギの絵のモデルで途中で切って並べるようなこと、世代間でお互いに協力しつつも、生活を分けて嫁姑問題を避け、土地高騰の中でまな板にあたる土地を有効利用できる住宅を、と考えて 1973 年 6 月に予算化し二世帯住宅の開発を開始しました。

家族年齢の変化（長ネギ）



二世帯住宅にする事によって…



二世帯住宅の着想イメージ：長ネギに例えて

分離度が高い、外階段で両世帯の空間を上下に重ねたものを1975年に発売し、その後内階段、連棟、玄関共用のバリエーションを加えました。ネーミングは各世帯が分離している、と言う感じを出すため二「所帯」ではなく二「世帯」住宅とし、業界に広く普及させることを考え商標登録はあえてしませんでした。

当初はなかなか売れず、3年で約120世帯の実績でした。お客様の本音をお聞きしようと入居宅を訪問させていただく中で、嫁姑の人間関係と住まいの問題が複雑でデリケートなテーマ故に日本女子大学の住居学科の先生に相談してみようと考え、武田満す先生、高橋公子先生にご指導いただくことになりました。地道な調査研究を続けていたところ、その活動がNHKの特別番組で放送されて次第に世の中に知られるようになりました。住宅金融公庫においても当初は賃貸用の怖れがあるとされ融資されなかったのですが、1980年「二世帯割増」の創設と共に融資が認められたことを印象深く記憶しています。



最初の二世帯住宅カタログ（1975年）

研究、普及活動を進めるため、1980年に二世帯住宅研究所を設立して、シンポジウムを開催したり、「二重奏」という機関誌を発行したりしました。その第四号に掲載された対談で脚本家の橋田壽賀子先生が「同居は適性検査で資格がないとできないぐらいむずかしい。」と言われたのに触発され、二世帯住宅居住者に集まってもらって「親子同居七つの原則」を議論して作りました。高密度居住であるという特性から、あるルールの下に同居していく、ということを普及していくことも大事なことかと思えます。この考え方を基にエレベーターや高齢者対応仕様を搭載して1983年に二世帯住宅の決定版として出した「ザ・二世帯」が1983年に日本経済新聞の年間優秀製品賞の最優秀賞に選ばれ、二世帯が世の中に認められたと実感しました。

二世帯住宅の、自立した生活を営みながら必要に応じて助け合うという形はこれからの高齢社会、あるいは子育て支援にとって望ましい住まい方であると思えます。この発展には建築だけではなく家族社会学、老年医学を含めて新しい知見を得て学際的に取り組む、ということが必要と考えます。

2. 二世帯住宅 現在までの展開

旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所長 松本 吉彦

二世帯を取り巻く初期から現在までの変化を3つに分けてお話ししたいと思います。最初に、初期の二世帯のテーマが核家族生活の実現であったのに対し、現在のテーマは親子ネットワーク構築である、という違いが挙げられます。各世帯の独立性を基本としつつも、近居に比べて家事・育児・介護などの関係を強く築けることが求められています。この要因として娘夫婦同居の増加、共働きの増加の2つがあると思います。この2つが重なる場合は子世帯の夕食は親世帯母が半分以上つくるなど、協力関係が強まります。



従って、現在では夕食の別々・一緒にの希望に応じてキッチンのあり方を決めていくことが基本になっています。優先順位としてキッチン、浴室、玄関の順で分けていき、それぞれシャワー室や勝手口などサブ的なアイテムを使いながら、交流協力とプライバシーとのバランスをそれぞれの家族毎に最適化できるようにバリエーションを展開しています。

その中で近年の代表的な提案として、親世帯も共に孫に関わる「孫共育」をご紹介します。核家族化の時代には親世帯の干渉を無くしたい、というのが子世帯の希望でしたが、現在は親世帯と孫で過ごすことが教育上もいい、という考え方が出てきています。この例が息子夫婦同居向けの「孫共育、家事分離」の提案で、孫の部屋を親世帯に近づけ目を届きやすくすると共に、子世帯のLDKに立ち入れない間取りを提案しています。

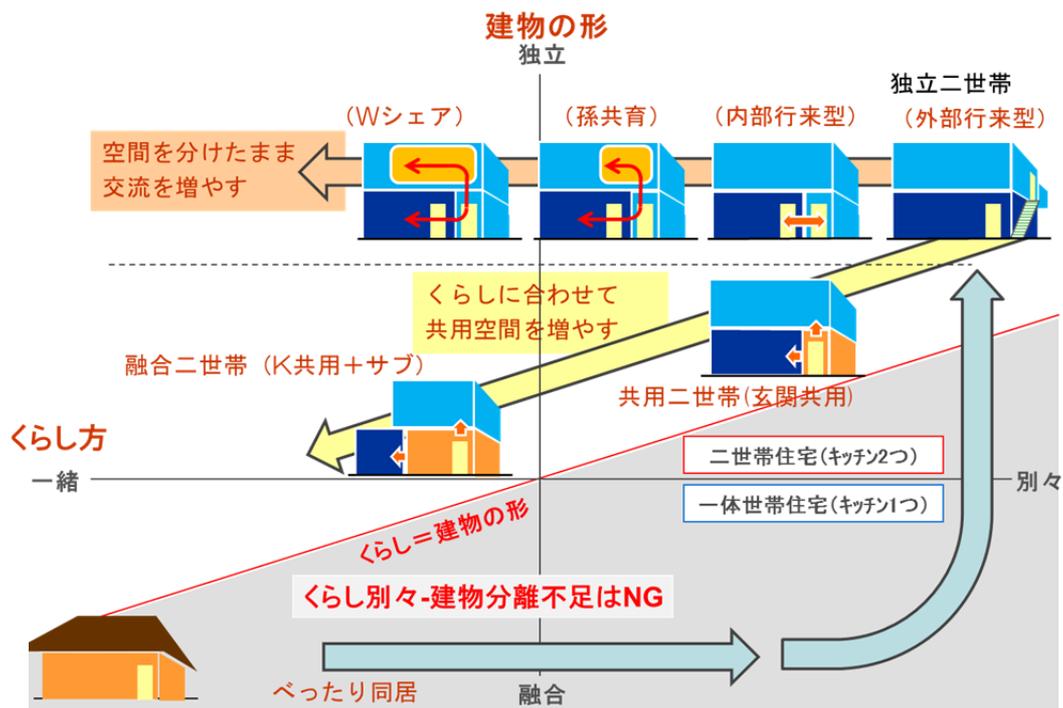
親世帯の介護配慮では、車いすで寝室からトイレ、リビング、庭、外出への4つの移動ルート確保に絞ってコンパクトな設計を可能にし、24時間介護の場合の立ち入り範囲を小さくして同居家族への影響を減らせるようにしています。

2つ目に、家族構成の多様化があります。親世帯では、両親に加え子世帯の単身の姉妹が同居する3人のケースが増えています。この単身者をパラサイトシングルではなく、0.5世帯と捉えて家づくりの構成員と見なし「充実マイルーム」を提案したのが2.5世帯住宅です。家族が増えるほど、家族変化も起きやすくなるので、家族変化を考えて、あらかじめ賃貸部分を組み込んで設計しておく「ロンド・コンパクト」という提案もあります。

3つ目に同居生活者の意識が同居のメリットを追求する方向に変わってきていることが挙げられます。反面、同居前には相変わらず嫁姑問題への不安は強く、母は協力負担、娘夫婦同居の夫などは居場所確保の不安もあります。実際に同居している人の不満は少なく、別々に干渉せず暮らす配慮をして生活することがコツのようです。

縦軸に建物の形、横軸に人の暮らし方をプロットすると、最初の二世帯住宅は共に分離した一番右上の世界を目指したわけですが、現在までの展開の方向性としては暮らし方に合わせて一部の生活空間を共用する方向、そして空間の独立性を保ったまま交流を促進していく方向の2つがあると思います。

最後に、二世帯住宅が果たす社会的な意義として、親世帯が住む既存住宅地の人口維持、新規インフラ開発の負荷がないこと、同居の子世帯にみまもりや介護サービスマネジメントが期待できること、消費エネルギーの削減などが挙げられています。今後も二世帯同居は注目されるべき住まい方だと思います。



建物の形と暮らし方の位置づけから見る展開の方向性

3. 大きな家の持つ可能性

日本女子大学 家政学部住居学科 教授 篠原 聡子

34年前の学生時代、私は高橋公子先生がパネリストだった旭化成の二世帯シンポジウムに参加し、その後も建築家として住む人の立場からの研究に大きな関心を持って参りました。東アジア各国の平均的住宅を比べてみると、東京の住宅がソウルや台北に比べて小さいことに気がきます。日本の住宅が客間という他者を受け入れる機能を削り、プライバシーの確保に特化してきたことが要因と思います。その究極がワンルームマンションですが、近年単身者が社会から孤立してワンルームマンションに住んでいるのを見ると、世帯が細分化していく流れの中で二世帯まとめて家を作る、という二世帯住宅の方向性は画期的なものであったのではないかと思います。



私は大学院時代の二世帯住宅の研究でも家の中の空間の分け方と家族の距離感、交流との関係を息子夫婦同居、娘夫婦同居の違いを意識しつつ調べていましたが、どうやって繋ぎ、どう離すか、ということは現在も変わらぬテーマのように思えます。離す方が行き着くところまで追求され、現在は繋ぐ方が求められているのではないかと思います。あまりにも閉じすぎてしまった家を街とつながる、人とつながる、の2つの方向から「大きな家」というテーマで考えていこうとしてきました。

この流れの中で、ここ10年ほどシェアハウスの研究に取り組んできました。この成果を盛り込んだのが **SHARE Yaraicho** です。最初はワンルーム案、長屋案も考えましたが狭いところにキッチンや浴室が7つもあるのに違和感を感じ、建設費も高く不合理で、7室のシェアハウスとしての設計に行き着きました。小さい住宅では空間をシェアするという戦略が江戸時代の長屋でも見られるように、現在でも積極的に考えても良いのではないかと思います。それが情報のシェアや助け合いのような別のメリットを生んでいきます。

近所とのいい関係を作るのがシェアハウスの場合難しいのですが、ここでは外の人があるの時に入ってきてもらう装置として、人が集まって住む大きな家にするということに加えて、町家のような土間があります。こうした土間は外からも人が集まりやすい、という特徴が調査で分かっていたので、ここでは家具作りなどの作業ができるような土間を作りました。作業空間があると、居住者がシェアの感覚を実感できますし、そうしたオープ

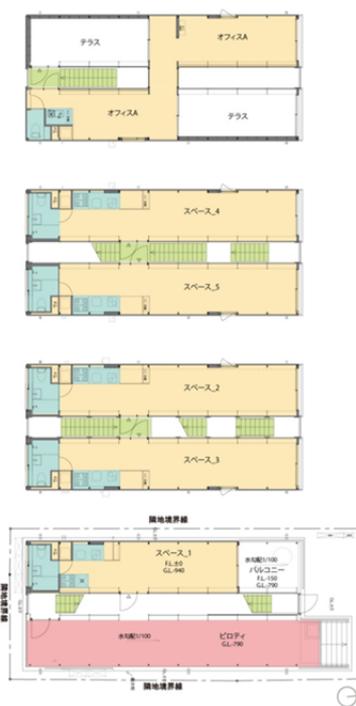
んな空間は貸したりして外に開きやすい場所もとれます。全体の構成は大きな箱の中に小さな箱を配置してその間に隙間を設けて全体的にゆるくつながる、という形になっています。キッチンの作り方はどんな生活をするのかと深く関わりますがここでは色々な道具や食器がオープンで見えるように意識して作っています。また玄関のボードで居る、居ないの最小限の情報だけはわかるようにし、本棚も旅行ガイドなどをシェアしています。屋上はハーブガーデンのある共用スペースなのですが、みんなで使うというより、ひとりで居られる場所として評価されています。少しルーズにざっくり作ることで居住者が使い方を考えてカスタマイズしていけるような空間を考えました。



SHARE Yaraicho 模型写真

私は何によって距離を作るか、を意識し、場所との関係を住宅が取り戻せるようにチャレンジしてきましたが、小さくなりすぎて孤立してしまった日本の住宅を、人と、地域とつながるものにしていく取組みという意味では、シェアハウスも二世帯住宅と共通するところがあります。最近共著者として出版した「多縁社会」の取材ではヘーベルハウスの2.5世帯住宅も訪問させていただきましたが、大きな家の中にこのような多様な「大きな家」のオルタナティブが出てくるといいのではないかと考えています。

ワンルーム案



長屋案



SHARE yaraicho



二世帯住宅 40 周年記念シンポジウム

パネルディスカッション

【司会】

大月 敏雄（東京大学 大学院 工学系研究科建築学専攻 教授）

【コメンテーター】

南後 由和（明治大学 情報コミュニケーション学部 専任講師）

【パネリスト】（発言順）

矢永 晶（元・旭化成設計(株) 社長 二世帯住宅の開発者）

松本 吉彦（旭化成ホームズ(株) 二世帯住宅研究所 所長）

篠原 聡子（日本女子大学 家政学部住居学科 教授）

1. 社会学の視点から二世帯住宅の論点を探る

大月 シンポジウム前半では、二世帯住宅の過去、現在、未来という流れで、二世帯をめぐるコアな1時間を過ごしました。後半のパネルディスカッションでは新進気鋭の社会学者で、情報社会学や都市社会学がご専門の、我々とはちょっと目線の違った、南後先生を明治大学から呼び寄せています。南後先生がコメンテーターとしてどういう切り口で前半のお三方の「コアな」発表を切ってくれるか非常に楽しみにしております。では南後先生お願いします。



南後 明治大学で社会学の教員をしております南後と申します。社会学をベースに、都市・建築やメディアについて研究しています。私の方から、お三方の講演を拝聴してのコメントと質問をさせていただきます。

今日矢永さんから二世帯住宅研究会の活動が1979年に立ち上がったというお話がありました。私はまさにその年に生まれて、郊外のニュータウン育ちで、松本さんのお話にあった晩婚、非婚化に直面している世代です。これまでの人生が二世帯住宅の背景に映し出されているかのように、今日のお三方の話聞いておりました。



これまで社会学が建築や住宅に対してどういうスタンスをとってきたかという、建築学や住居学は物理的な空間が家族や社会のあり方を規定すると考えるのに対し、社会学は社会、例えば家族のあり方が変わっていくことによって、空間のあり方や住宅の使い方が変わっていく、つまり必ずしも実際の社会は、建築計画や住居計画通りにはいかない、と考えるんですね。

有名どころで言うと建築家の山本理顕さんと社会学者の上野千鶴子さんの議論があつて、山本さんは空間が社会を規定する、それに対して、上野さんは、社会の方がむしろ空間のあり方を決めていくんだ、と「プロレス的」なバトルをやっていたように(笑)、下の世代である僕からは見えていました。そうした建築家と社会学のバトルって最初は面白かったのですが、その後あまり生産的な議論にならず、相容れないまま終わっていくというところがあった。それに対して下の世代の私のような社会学者は、建築学に関して、空間と社会の関係が互いにフィードバックをしながら、どういう循環関係を持っているのかをきちんと見ていこう、というスタンスでいます。

2. 論点1：商品でありながら公共に貢献する二世帯

南後 そういう見方で言うと、二世帯住宅は核家族、高齢社会、嫁姑関係、土地高騰等の社会問題や、住宅金融公庫の融資対象になるかどうかという制度の問題の中で、単に建物に閉じずに、社会の変容と密接に絡み合いながら、これまで40年その姿形を変えてきたということがよくわかりました。その中でこの「二世帯住宅」というネーミングが、商品としてどう流通していき、どういう社会的効果をもったのか、ということに関心が湧きました。印象的だったのは、商標登録をしてないという点です。これは今の時代の言葉を使えば、「新しい公共」ではないかと。従来公共的なサービスというのは行政が提供するものだったのに対し、5年前あたりから出てきた民間、大学、NPO等が公共のサービスを担っていくという考え方を、「新しい公共」と呼びます。この点を踏まえると、「二世帯住宅」という言葉が商標ではなく、普通名詞として流通したことに、どういう社会的意義があり、効果があったと言えるでしょうか。

社会学は「そもそも論」というか、前提を問い直すという特徴があります。松本さんのお話に「孫共育」という商品の提案がありましたよね。僕の感覚で言うと、孫共育のあり方って商品ではないんですが、それをパッケージ化して、住宅と家族の関係のあり方として流通させていくことの狙いをお聞きしたい。これが矢永さん松本さんのお二方に共通する質問です。

矢永さんへは家族社会学や老年医学など、「学際的に取り組む」というお話についてもう少し聞いてみたいと思いました。2.5世帯住宅や篠原先生のシェアハウスでも、もはや住宅の話が建物に閉じていない。地域のあり方や空き家対策、環境やエネルギーの問題も関わってくる。さらにはSNSなど、メディア環境の変化を考えると、二世帯住宅のあり方が、いわゆる狭い意味での器としての建物に閉じず、様々な社会的問題に対してどのようなアプローチができる可能性を持っているのかを、お聞きしたいと思います。

3. 論点2：単身者として0.5世帯が居ることの可能性

南後 次に、松本さんのお話に対するコメントに移らせていただきます。とりわけ印象深かったのは、2.5世帯住宅の中の0.5を足したことのインパクトや、訪問介護とか家族変化で空いたスペースを賃貸として使うというお話です。住宅に付随する福祉や制度などの問題と積極的な関係を持つ方向に向かっているという点が興味深かったです。

また、二世帯住宅はキッチンが2つあることを前提にして始まったというお話がありました。篠原先生からも「接続と隔離」、というキーワードが提示されましたが、キッチンはつなぐ装置としてどういう可能性を持っているのでしょうか。言い換えると「食の可能性」

についてです。

2つ目は、先ほどの0.5世帯と関連して、これからの住宅における家族のあり方、家族の単位をどう考えているのかについてです。家族と地域との関係において、2.5世帯住宅は既存の住宅とはどういう違いがあるのかをお聞きしたい。

大家族制から核家族へ移行し、もはや核家族のあり方自体も変わってきているという

お話もありました。今は個人化の時代です。未婚、晩婚もそうですし、モバイルメディアやSNSでは、全員がそれぞれアドレスを持っていて、お父さんもお母さんも子どもも、家族以外のネットワークに数多く属しているわけですよ。『「シェア」の思想』（LIXIL出版、2015）という本の中でも言及されていますが、もはや家族というのは、そうしたいろいろあるネットワークの一つでしかない。そう考えた場合に、2.5世帯住宅の0.5の部分のフレキシビリティについてお聞きしてみたいなど。



4. 論点3：「シェア」することによる新しい空間像

最後、篠原先生のお話についてです。矢永さんによる二世帯住宅の誕生と経緯の話から始まり、松本さんからは2.5世帯について、介護とか賃貸とか、外部に開かれているという指摘がなされ、人口減少で街自体が過疎化していく中で、多世代居住はその対策になるというお話が続きました。そして篠原先生のお話は、「接続」と「隔離」というキーワードで始まりました。そうした一連の話を聞いて、二世帯住宅に対してこれまでは「べったり同居」のイメージが強かったんですが、矢永さんが二世帯住宅という言葉に込めた別々に住む、つまり「隔離」が二世帯住宅の起源として既に含まれていたことがわかりました。まさに「接続」と「隔離」の両方のベクトルを二世帯住宅の誕生から既に内包していたという矢永さんのお話は、現在のシェアハウスも接続と隔離がテーマだという篠原先生につながり、話の流れが良かったなと思って拝聴していました。

篠原先生のお話の中でシェアという言葉が繰り返し出てきましたが、パブリックとプライベートという二元論や二項対立とは違う、新しい空間のあり方をシェアがどう提供するのか。またシェアハウスを地域とつないでいく中で、見える／見せるというお話がありましたが、シェアハウスがどういう地域とのつながりを持ち得るのかより具体的にお聞きしたいです。

5. 生活を分けた二世帯住宅で嫁姑問題解決を目指す

大月 やはり社会学者は建築屋さんとは違った観点で、ある種ものごとを希望的に捉えて、その現象なり言葉なり考え方が、どういう社会的な意味、可能性を持っているのかを考えるんだなと思って、感心して聞いていました。

まず矢永さんへのコメントを含めた質問が2つ南後さんから提示されました。一つは、二世帯住宅というネーミングに、どこまで社会的意義を感じながら戦略性をもって作想的、意識的にやられたのか。企業が商売として世間にこれを広めていきたいときの意識、について聞かせて欲しいという質問でしたが、いかがでしょうか。

矢永 二世帯住宅が持っている社会性というものを意識しました。一番のポイントは「嫁姑問題」というキーワードです。私見ではありますが、戦後の新しい憲法の中に謳われている個人の自由、平等の思想に対して、それ以前からの家族制度の下での嫁姑は、主従関係で成り立っていたと思うんですね。姑が主、将来家督を継ぐ長男の嫁が従でなくてはいけない。それは家事を任される女性にとっては非常に辛い。食事の内容も、世代によって年寄りが食べるものと、子どもを抱えている若い世代では違うにも関わらず、どちらかが主でどちらかが従でやらざるを得ない。そこで二世帯住宅でキッチンを2つに分けることにより、主従関係ではなく、平等に、対等にできるという意味合いを入れたんですね。



そして制度から見た時、ほとんどの皆さんが家を建てる時に利用した住宅金融公庫の融資では、当時キッチンは1つでなくてはいけない。2つある家は、1つを家族用ではなく賃貸とする可能性があるという性悪説に立って融資されませんでした。そういう制度を変えるのにも二世帯住宅という商品の姿勢を訴えていくのが、企業の役目であり、社会性であったと思うんです。

そうした社会的意味合いから見るとネーミングも、旭化成だけの名前でやるより広く世の中の皆さんに二世帯という言葉を使っていただこうと。嫁姑は家の中で主従の関係ではなく、平等に、主体性と独立性を持って生活しながら、いざとなった時には助け合おうというような形が望ましいのではないかと伝えたかった。

従って旭化成独自ではやらずに、業界全体が大合唱してもらおうのを待とうよということになり、商標登録をしなかった。そういう気持ちでやっていたところに、今度は金融公庫さんが「二世帯」という言葉をとって二世帯住宅割増をつくり、融資を認めるように変わってくれたことは嬉しかった。

そして今、住宅会社さん皆さん「三世代住宅」などと言わずに、二世帯住宅と言ってい

ただいてるんですね。これは南後先生が先ほど仰った「新しい公共」と言うんですか、民間でもそういう風に働きかけができるという、一つの事例ではないかなと。そういう意味で、我々が心づもりを持ってやったことがなんとか形になって、成果が出てきているんじゃないかなと感じている次第です。



大月 思ったより革命的な意図をもって取り組まれていて、図らずもそれを社会が結果的に受け入れているというご意見だったかと思えます。南後先生、いかがですか。

南後 普通名詞、一般名詞化したことがすごいなと。二世帯住宅が誰でもが使える言葉として定着したのは、「コモン」という観点からも評価できると思います。

大月 40年目の今から思うと非常に示唆的な、幅広い言葉だったなと思いますね。果たして50年目はどうなるか(笑)。それで、南後先生からの2つ目の質問にあります、矢永さんの「学際的に取り組むことが大事」というご発言の意図を具体的にお聞かせいただけないでしょうか。

6. 建築学の範囲だけで考えず他の分野に学ぶ

矢永 二世帯住宅の開発を手掛けていた頃、集まっていたのは建築が専門の仲間ですね。しかしよく考えてみると、例えば法律の問題で、憲法の内容を家庭に当てはめた時の意味とか、家族社会学という分野があると初めて知ったとかで、これらを学ばないかなと思いました。またジェントロジー、老年医学というんですか、年寄りが肉体的にどう変化していったら、住宅の中でどう対応しなくてはいけなさを、単に建築学の範囲にとどまらず、もっと幅広くやっていかなくてはいけなさを。例えば、日本では「手すり」という言葉一つしかないけれど、英語では「ハンドレール」と「グリップバー」という言い方、2つあるんですね。ハンドレールというのは、病院の廊下なんかで手を添えて歩行できるように取り付けられているもの。グリップバーというのは、トイレとかお風呂に付いている、握って安全を確保するもの。進んだ国では目的ごとに名称まで違っておったのに、日本はそこまでいってなかった。そういう意味でも、いろんな勉強をしなくてはいけなさを感じた次第です。それはもう40年前の話ですから、新しい動きに対して、よりブラッシュアップしなくちゃいけないと感じています。

大月 なるほど、ご自身の開発の中で社会学とか医学とかそういう方面での学際性で目を開かれたわけですね。おそらく今から二世帯を考えていく時も、学際的に考えなくてはいけなさではないかということで、松本さんへの質問に移りたいと思います。

7. 商品というパッケージで社会へメッセージを届ける

大月 松本さんには2つ質問があって、矢永さんに続いて「孫共育」などの商品がもつ社会への訴えかけのお話と、キッチンが「つなぐ要素」としてもつ意味、もっと言うと食の可能性をどんな風に考えていらっしゃるのかについて、お願いします。

松本 まず最初に、矢永さんの大きな話の後では私の話はセコくしか映らないと思いますが(笑)、なぜそうなるのかというお話をさせていただきます。

「孫共育」や、「2.5世帯」をなぜ商品というパッケージにしているのか。「孫共育」で言えば、核家族のニーズに応じて世帯を別々に分け「親に干渉されないで子育てができるぞ」となったわけですが、今度は「それだけでいいのか」という疑問も出てきた。そこで、親世帯も参加して三世代で子育てをしよう、でも、子育て以外では干渉されないようにしよう、という、元の嫁姑問題の世界に戻るのではなく新しい考え方を提案



したかった。「2.5世帯」も、結婚して夫婦の単位で家を持つという核家族モデルの中で「結婚しなくても、あなたの世界を持てます」というメッセージを届けたかった。二世帯という大きな枠組みの中で、その一部分を一步先に進めるパッケージを提案している、ということです。

ご質問の、キッチン2つの意味では、核家族が自分達だけのダイニングやキッチンを持って好きな料理をつくって食べましょう、というのが当初の考えだったと思います。最近に変わってきたのは、キッチンは料理をつくる場所で、ダイニングは食べる場所、二つは元々全く違うものであると。ダイニングは一緒に集まって食べたい。だけど、キッチンで共同の作業なんかしたくない(笑)。そういうような感じになってきていると思うんです。その流れを踏まえ、例えばダイニングキッチンなら、親世帯のキッチンは二人用の食事をつくる場所、でも親世帯のダイニングは二世帯が集まって6人が食べる場所、というような提案を現在しています。「作業を超えて人が集まる」という効果が、食の場合にはあるんじゃないかなと思うんです。当時二世帯住宅で言われていた「キッチンを分けましょう」というフレーズから、今は、調理をする場としてのキッチンと、食をする場のダイニングは、意味合いを分けて考えるステージにきていると思います。

大月 ありがとうございます。昔から「釜を分ける」、とか「同じ釜の飯を食う」みたいな表現があって、「釜」というのは人間関係を象徴している。それは多分、昔は炊事の作業がめちゃくちゃ大変だったからで、水を汲んで来て、火を起こして、煮立つのをずーっと

待たなきゃいけない。今だとスイッチ1つでできちゃう。そうすると、釜という問題に対する考え方が変わってくるのではないかと思います。90年代で、嫁さんが「チン！」とかしてたら絶対お姑さんから「まあ。ちゃんと料理しなさいよ」とか言われちゃったりしたんだけど、今は親世代もチン！ですから。次のご質問の、時代の移り変わりキッチンのある方に関してはいかがですか。

8. 情報メディアの進化が家族と住まいを変える

松本 調理器具や洗濯機などは非常に進化し家事が減ったわけですが、実はもっと進化が影響したものがあって、テレビと電話なんじゃないかと思うんですね。昔はテレビは一家に1台だけあるということが前提で、家族の中心ということでリビングルームという見る場所が設計されてきた。でも今は0.5世帯のお部屋にテレビがあるわけです。要するに「自分のテレビ」が持てるようになってきているわけですね。電話は最たるもので、電話を世帯別に引いてくれというオーダーが昔はあったんですね。今は、皆さんケータイをお持ちなので、内緒で電話をしたければどこでもできる、トイレへ行ったりしてるんですけど(笑)。そういった情報関係の進化というのは、家のあり方については、より「一緒でも大丈夫」な状況をつくっているのかなと思います。

大月 話がどんどん南後さんの方に向いてきましたが(笑)、そのへんお得意だと思いますので南後さんコメントをお願いします。情報のやりとりの飛び道具が出てきて、部屋に居ながらにして、家族を介さず社会とつながっちゃう。住宅を語るアイテムとして、キッチンは「釜を分ける」のが重要だったんだけど、どうやら松本さんのお話だと、情報ツールみたいなのが今後重要なんじゃないかと。南後さんから見て、今後住まいの中でキッチンとか電話とかケータイとかが、住まいとか家族のかたちを、どんな風に変えていく可能性があるのか。ご経験を踏まえてお話いただければと。

南後 まさに家族のあり方自体が、情報メディアの変化にともない変わってきています。例えば映画で言うと、ちょっと古いですけど『家族ゲーム』みたいな、家族でも今僕達が並んでいるような横並びの机で、視線を合わせず食事をする。子どもが深夜に帰って来て、ご飯だけ置いてあって、お風呂に入って寝る。で、朝起きたら家族と顔を合わすことなく又学校や仕事に行くという。このような「ホテル家族」と呼ぶ家族関係は、従来からもありました。現在は家族関係の個人化が、SNSなどのメディア環境の変化によってより進展しています。例えば今、買い物もネット通販で個人で買う機会が増えてますよね。つまり、ネットでは家族で買物をしないわけで、それぞれが個人のドメインやアドレスを持ってコミュニケーションする。もはやSNSを介したネットワークの方がコミュニケーションは密になっていて、血縁関係にある家族はそのさまざまなネットワークの一つでしかなくなりつつあります。そうすると個人個人が外部との人間関係を持つようになるので、

家族以外で食事をする機会も増えてくる。血縁関係の家族以外に開かれたダイニングのあり方というのも、これから考えていくべきなのではないかと思います。 もう一つ、これから空き家も増えてくる時代において、ネットやSNSと、2.5世帯の0.5世帯の部屋の賃貸の関連で言うと、Airbnbのことが思い浮かびました、Airbnbは、住宅のうち余っている部屋をネットを介してホテルのように貸し出すプラットフォームです。もはや東京都内は、ホテルの稼働率が山手線の内側であれば、90%を超えるような状況が続いています。2020年の東京オリンピックに向けて、これから新規のホテルが建つとしても、明らかに数が足りない。そのため旅館業法の規制緩和をして、民間の住宅でも空いていたらホテルのような貸し方を認めることが検討されています。つまりネットを介せばニッチな隙間、ニッチな空き部屋もマッチングがうまくいく時代において、2.5世帯の空いた部分に、家族以外の別の他者が泊まる可能性がある。そういうことが、SNSが出てくることによってより現実味を帯びてきていて、それはひいては地域のあり方自体にも変化をもたらすのではないかと思います。

大月 ありがとうございます。南後さんの最後の話にある、「他者をどう受け入れるか」ということを考える時におそらく、2.5世帯の中の0.5というのは、かなりフレキシビリティを持った他者で、おじさんとかおばさんじゃなくて他人ですらあり得るということを考えさせられました。そうすると、家族っていったい何なんだとか、家族と家の関係に他者を入れたらもっと複雑で、あるいは面白くなるんじゃないか、という話が出ました。松本さんの的には今後の企画のあり方として0.5の広がり方、他者も含めた、あるいは他者といってもいろんな他者がいて、近所のおばちゃんおじちゃんも他者だし、地球の裏側からネットでやってきましたみたいな人も受け入れるかどうかという、いろんな新しい世界が広がると思うんですけども、そのへんはどうですかね？

9. 家族と他人の違いは社会からの眼と財産継承

松本 篠原先生の出番をそろそろつくらないといけないですね(笑)。篠原先生が「多縁社会」の本を書かれる時に、二世帯住宅とシェアハウスの違いって何ですかと聞かれたことがありました。二世帯住宅は世代間の財産の継承があるのに対し、シェアハウスは非常に身軽で、この集団がイヤだったら出て行けばいいという人達の集団なんですね。要するに、二世帯住宅から出て行くと「あそこの嫁はケンカして出て行った」みたいな話になりがちな社会の縛り、財産継承の縛りみたいなものが、家族とそれ以外ではかなり違うと思っています。

2.5世帯の時に、0.5世帯の方にも家に資金を出してもらうために、財産的な一体性みたいなものを強調しようとしたのですが、むしろ周りからは外に開く可能性みたいなことをたくさん言われました。おそらく核家族、夫婦単位で家をつくるということ自体を

壊したからだろうと思うのですが、私自身は家族で住むことと、社会に開いて他人が住むことの間には結構なギャップがあると思っています。そのギャップは確かに Airbnb のように「1晩貸します」みたいな、住むことと明らかに違う形ならできるかもしれないとは思いますが、実際の例はまだないと思っています。

大月 なるほど。面白い展開になってきたと思います。財産関係の関わりがあるのか、いつでも逃げられる態勢でいるのか。そういう中においてシェアの可能性を、篠原先生は語っておられる。南後先生からもシェアの可能性と、地域とのつながりにおけるシェアの可能性、という質問をいただいております。松本さんの今のお答えを踏まえて、シェアが地域や、財産等と本当に関わりを持つことができるのか。地域や家、屋敷のマネジメントみたいな責任ある立場で、どれだけそこを耕す人間になり得るのか。その部分が一つ問われている。必ずしも皆が皆そうなる必要はないですが、誰かがそこを責任持って耕したり継承したりしなきゃいけない状況の中で、シェアというのはどういう課題と限界、可能性があるのか。非常に難しい問題ですけど、篠原先生いかがでしょうか。

10. 家族同居とシェアハウスが共に必要とされる時代

篠原 質問が最終的にどんどん難解になって(笑)。家族がまず、SNSの進展や何かで、住むあるいは生きていくことに関わるネットワークの中で、ワンオブゼムになるとは、私はあんまり思っていない。家族制度みたいな拘束性はないと思いますが、やっぱり今の法制度や、家族の結束に対するアタッチメントを考えると、家族関係が相対的なものになることはない、と感覚として思っています。

でもその中でシェアみたいな住まい方が、家族というものをラクにするだろうな、とも思っていて。家族というものが生きていくための非常に重要なインフラだと思っているんですが、一方でそういう逃げ場というか、オルタナティブが用意してあることが、すごい重要だと思う。昔の家であれば、大きな家の中に様々な人の居場所や共有空間があったわけですが、その大きな家が持っていたパーツが分かれてシェアハウスみたいになっているかな、とも思っています。

私達の例で言えば、シェアみたいな住まい方と、血縁家族で住むのが、あるセットになっていくかなとも思っています。例えば地域の中で、人はどういう時にコミュニティや家族、つながりがあるのかを自覚するかというと、外から人が入ってきた時。ニューカマーをどうやって受け入れるかを考えた時に初めて、自分達はどのようなルールを持って、どういう風に人に接するかを自覚すると思うので。そのニューカマーを受け入れる場所として、



『Arrival City』ではないですが、新しい人を地域に受け入れる時に介するのがシェアハウスで。ニューカマー、今で言うと外国人、が入って来る。それを通じてまた一段後ろの、家族で住んでいる人達との、拠点にもなっていくような、そんな役割がシェアハウスにあるかなと思っています。

大月 大変美しくまとめていただいてありがとうございます(笑)。『Arrival City』というのは、日本語に訳されていないんですけど、ダグ・サンダースというカナダのジャーナリストが書いた本で、世の中にスラムってありますよね？ スラムはダメなものだということで、全部駆逐される運命にあるんですけど、スラムは新しくやって来た人が最初に住む場所で、そこから「わらしべ長者」みたいに向上が始まる Arrival City なんだと。そういう意味で言うと、例えば今や3組結婚する毎に1組が離婚するような日本の社会では、2.5世帯の0.5世帯がニューカマーなのかもしれない。彼ら彼女らをどうやって家の中で受け入れるか、あるいはSNSで一見くっついているような人々でも、いろいろあって0.5として受け入れるレセプターとして住宅を考えていくと、もうちょっと多様に、あるいは前向きに捉えられるんじゃないかと。そういう話かなと思って聞いていました。

1 1. 親世帯が戦後教育世代となり嫁姑問題が解消

大月 私の方からコメント的なことを喋りますと、今日の矢永さんの話を聞いていて非常に面白かったのは、1980年に住宅金融公庫が二世帯住宅にお金をつけるようになった話。僕の記憶が正しければ、5年位前後するかもしれないけど、住宅金融公庫がマンションに融資を始めたのがあの時代。あるいは公営住宅は、それまで夫婦と子持ちしか入れなかったのが、福岡の身障者の裁判で単身でもいいよとなったりとか、戦後多様化してきた家族に対応して制度を変える転換点であり、1970年あたりから仕組まれてきた住宅産業が花開く時期でもありました。70年代のオイルショックを乗り越え、公的住宅に代わって、住宅産業を盛り上げようとした時期で、バブルの前夜です。そこにうまく乗っかって、二世帯というのが矢永さんが仰ったようなある革命的な意図を持って、社会に進展していった。で、その革命はどうやって成し遂げられたか。僕、さっき計算したんですが、矢永さん何年のお生まれですか？

矢永 昭和17年。

大月 昭和15年、1940年以降の生まれが僕はキーだと思っている、彼らは戦後教育第一世代なんですよ。昭和15~19年は、産めよ増やせよでどんどん産まれ落ちた世代で、結構ボリューム多いんですよ。この世代より上は戦前の脳みその人達で、戦前の脳みその人達と戦後の脳みその人達が、姑と嫁の戦いを繰り返していた。私のおふくろが昭和19年生まれ、祖母は大正の初めの生まれで、相当なバトルをやって、私は若い頃「もうこんな家に住みたくない」とずっと思っていたんです。で、そういうのがいつ頃なくなったかと計

算してみると、2000年位なんですよ。

2000年位だと、戦後生まれの人が60歳になって孫がで始められるような世代になる。そうすると、嫁さんとお姑さんがいがみ合うというのが少しずつなくなっていく。橋田壽賀子の『おしん』が1983年ですが、「嫁姑はうまくいかんぞ」みたいなもののピークはその頃で、それが今や溶解して、最初矢永さんが仰った「革命的に二世帯を」というのが、今は世の中が「そんな革命を頑張ってやらなかったって、気が合えばできるんじゃない？」ぐらいに、ちょっとハードルが低くなった感じが僕はしてまして。だからこの40年間に実は二世帯は、1980年位に今風な家族を住宅産業として促進していこうという追い風があり、その後2000年に世代交替することによって知らないうちに革命が達成されていた。

それで今2015年は、どっかの政権が「同居、近居勧めます」とか言って、僕はそれに別な意味、きな臭い「昔ながらの」みたいな意味を感じていて。如何に、ちゃんと戦後我々が築いてきた民主主義の路線を堅持し、その延長に、0.5世帯という人々を地域あるいは家族の空間に入れるのか、そういうレセプターとしての住宅をつくっていかなくちゃいけない。その中で今考えなくちゃいけないのは、家族と一緒に住む根拠。おっばいあげなくちゃ、おしめ替えなくちゃいけないというのは立派な根拠だけれど、高校生、大学生の娘、息子と一緒に住まなくちゃいけない根拠はどこにあるんですか？という。じゃあ家族とは、家とは何かというのは、結構真剣に考えていかなくちゃいけないんじゃないか。つまり、2.5世帯という言葉があるけど、おそらく家族そのものがシェアで、0.5×n世帯とかね。そういうのが大事なかなと思います。

12. 世界の中での二世帯住宅の意味を考える

大月 あと、もう一点、今日の議論で、皆さんにお伺いしたいなと思ったのは、これ日本人の話ですよ。僕、近居の研究をやっているんですけど、それをフランス人とかイギリス人の前で言うと「何てバカな研究をやっているんだ」と怒られる。近居というのは、国が子育て施設をつくってくれないからしょうがなくやってる側面もあるんですけど、家族の中で解決するのを前提に研究することは、社会の墮落につながるんじゃないかみたいな、とってもアングロサクソンの怒られたりするんですけど。

逆にイタリアなんかだと、BSで毎週やってる『イタリアの小さな村の物語』を視ると、近居とかしてる。同じヨーロッパでも、家族のつながり方が相当に異なっている。日本、韓国、台湾でも違って、この議論を国際的にしたらどうなるか。多分その発想が、矢永さんの講演の最後の「世界へ目を向けることが必要」に通じるのだと思います。そうした意味で我々のこの極めてジャパニーズな議論が国際的に通用するのかなが気になるところなんですけど、篠原先生はいろいろ調べていらっしやいますね。

篠原 アジアでは、日本の孤立の度合いが極めて深い。少子化は日本よりも韓国、台湾の方が進んでいます。家族のネットワーク、大家族みたいなものは残っていて、東南アジア、例えばタイなんかだと宗教のネットワークが日常であって、スラムを調査しても孤独死とかは「よくわからない」「どうして？」って言われるんですね。日本における「孤立」の問題は極めて深刻で、いくところまでいっちゃった感がある。ヨーロッパはそもそも一人で生きることが前提の社会なのに対し、日本は個人がしっかりしていないのに、結果的に一人になっちゃってるという状況は、しんどいと思いますね。



大月 外国から見た時に、日本の特徴的な問題として見えるのは「孤独死」だったりするのですか。

篠原 私はそう思っているんですけど。社会制度がしっかりもしていないし、かといって宗教や大家族が残っているわけでもない。どっちもない今の日本の状況を補うべく、近居や親族ネットワークということが言われているのかもしれない。

大月 最後に矢永さんが書いている「世界へ目を向けることが必要」というのと、今話していることとのつながりはありますか？

矢永 世界に目を向けて、まだまだ勉強しましょう、というのが主眼ですね。

大月 そういう意味で現役の松本さんは、世界の中での二世帯みたいなことは何か考えてらっしゃいますか。

松本 私自身イギリスに留学していた時がありますが、親子関係における考え方は日本と全然違って、同居は親離れ子離れできない悪い家族関係と考えられています。しかし日本の核家族化は、ヨーロッパ、アメリカと同じことをやろうとし過ぎたと思っていて、「親子で住むのは良いこと」という日本の同居文化を見直していこうと思っています。

矢永 最後に一ついいですか。この件に関して私がお伝えしたかったのは、日本の二世帯では親子が2つの世帯に分かれて、主体性と独立性を持って住み、必要な時にはお互いに助け合う、というのが一貫している考え方なんですけれど、世界の中にはまだ住宅に困っている人、国民もいる。一つ屋根あるいはテントの中で大家族で住んでいる方々が少し豊かになって、住まいに何かを求めようとした時に、日本でのべったり同居から二世帯住宅への進化つまり家族間で主体性や独立性を尊重しながら、いざという時にお互い助け合えることは世界共通の願いではないかなと。そういう意味で、二世帯住宅にまつわる動きは、場合によっては日本の住文化の一つとして、おこがましいかもわからないけれど、世界にお伝えすることが社会貢献じゃなからうかと。そんな感じを持っています。

大月 はい。本当にうまくまとめさせていただいてありがとうございます。さすが戦後教育第一世代、大先輩で(笑)。極めて冷静に意義を語っていただきました。予定の時間を過ぎてしまいましたが、強引な司会に付き合ってください、どうもありがとうございました。

二世帯住宅 40 周年記念シンポジウム

配布資料

二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
1. 趣旨説明

二世帯住宅40周年記念シンポジウム

趣旨説明

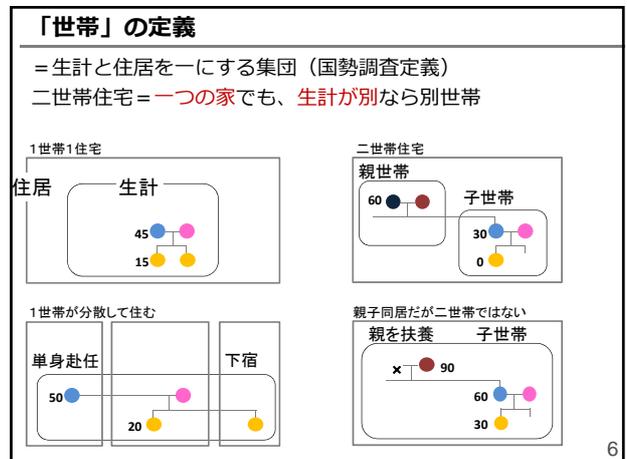
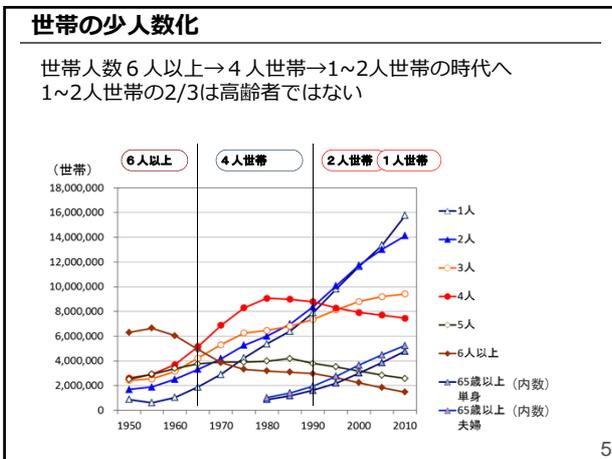
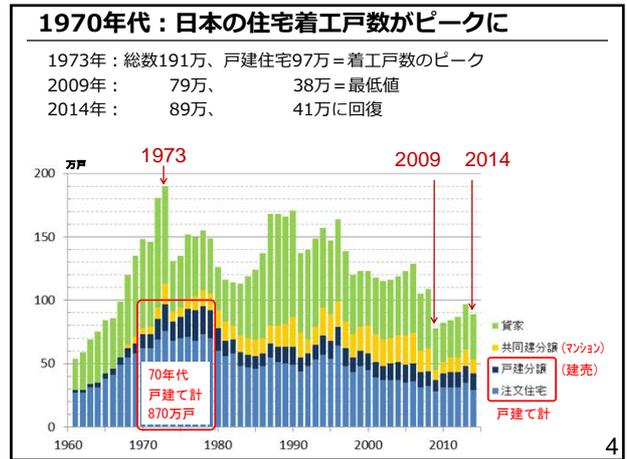
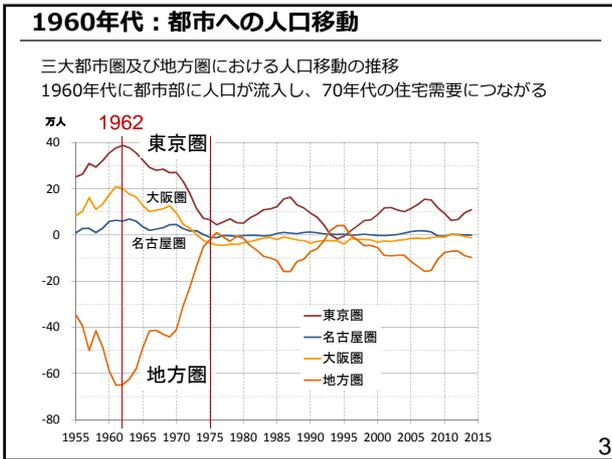
旭化成ホームズ株式会社 二世帯住宅研究所
松本 吉彦

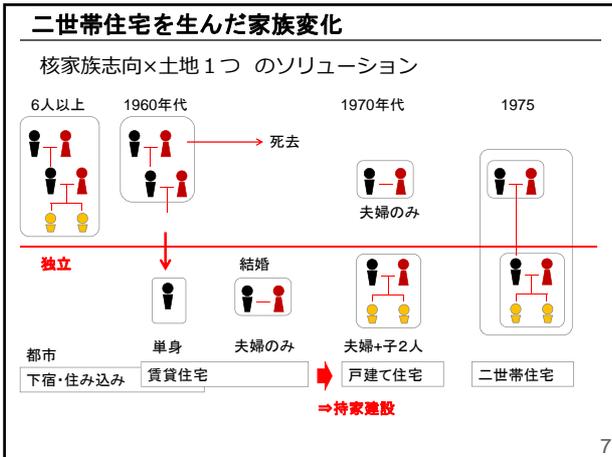
1

1975
業界初の商品化

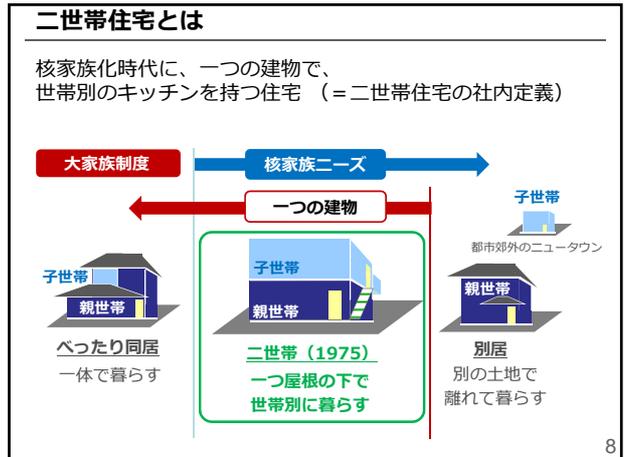
「二世帯住宅」
の名もこのとき誕生

2





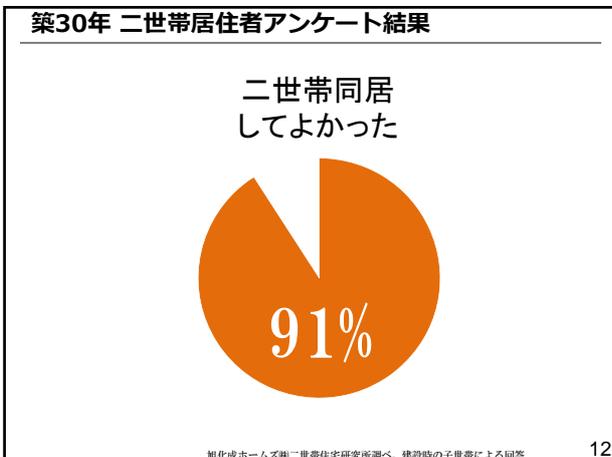
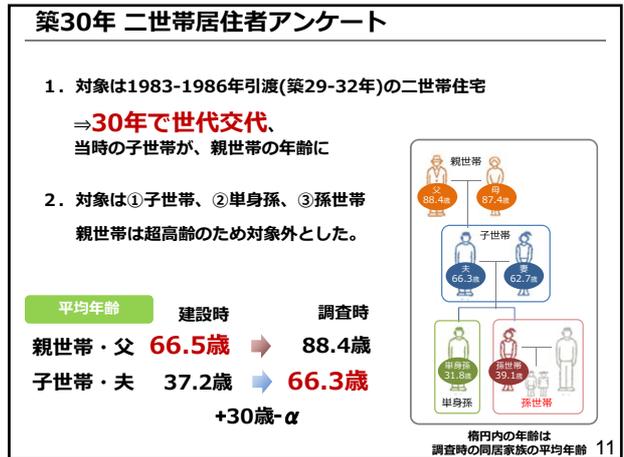
7



8



9



12

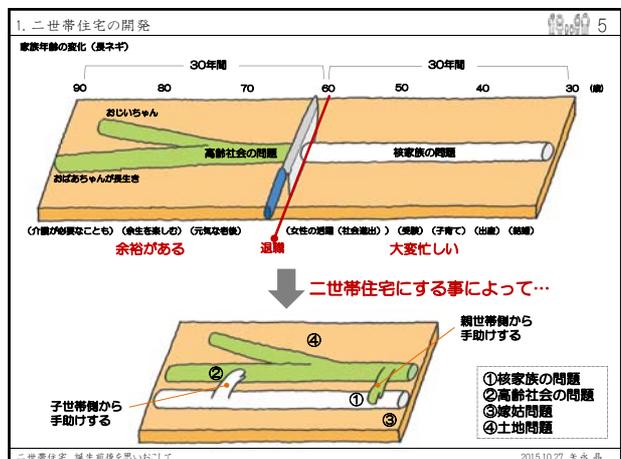
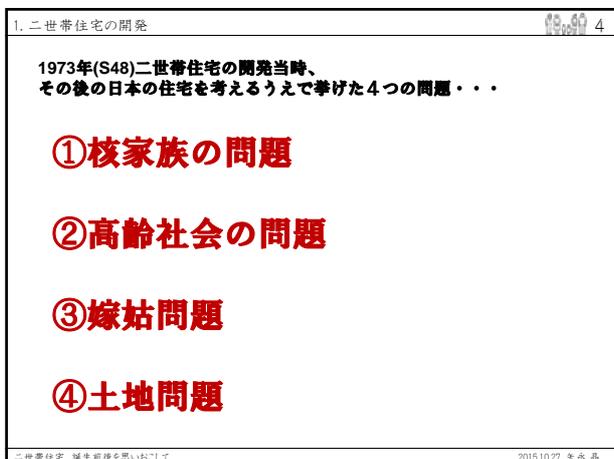
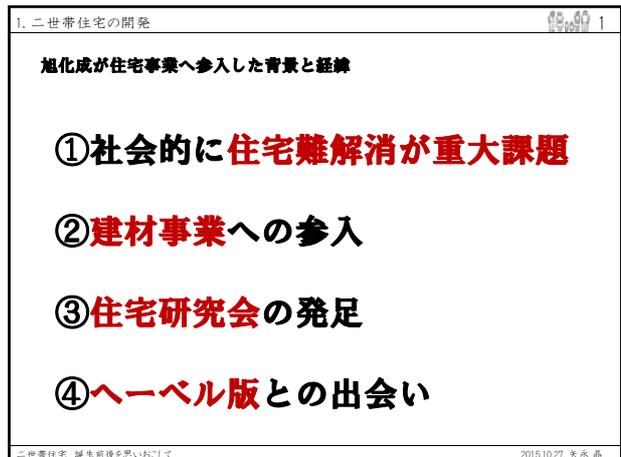
2015 =

二世帯住宅
40周年 HEBEL HAUS

二世帯の誕生から現在までをレビューし
今後、二世帯住宅はどうなる？
を考える

13

二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
2. 二世帯住宅 誕生前後を思い起こして



1. 二世帯住宅の開発 6

二世帯住宅なら 親子一体同居ではなく、 世帯別に独立。

嫁姑問題？

べったり同居

➔

独立できる！

二世帯住宅

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

1. 二世帯住宅の開発 7

二世帯住宅で 「完全分離」して都市に住む。

2F玄関

1F玄関

外階段

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

1. 二世帯住宅の開発 8

1975 (S50) 「二世帯住宅」

業界初の商品化

- ・発売に際して特徴が明確なこと
- ・住宅融資の点から

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

1. 二世帯住宅の開発 9

発売当初より4つの建物タイプを提示
当時のカタログより...

内階段・外階段・共用・連棟

タイプ タイプ タイプ タイプ

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

1. 二世帯住宅の開発 10

「二世帯住宅」

- ・ふたつの世帯の主体性と独立性を尊重するという考えから
**「二しょたい住宅」ではなく、
「二“世帯”住宅」とネーミングしました。**
- ・住宅業界全体で普及することが社会的にも望ましいと、
広い気持ちで、旭化成として**商標登録を見送りました。**

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

2. 二世帯住宅に対する社内外への発信取組 11

1979年 (S54) 二世帯住宅研究会活動

7:54

- ・二世帯住宅研究会の発足
- ・日本女子大学の当時の家政学部長
住居学科の武田満す教授にご指導を頂き、
大学と社内有志で発足
- ・この活動が目ざされ、NHKより取材
(スタジオ102で2度、特番で放映された)

50軒100世帯の入居宅訪問調査

本音を引き出せるよう、
2人一組で2班で訪問し、
親世帯と子世帯と
**“別々”かつ“同時同帯に”
インタビューを実施。**

7:55

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27 矢永 晶

4. 二世帯住宅に対する住宅政策 12

二世帯住宅に対する当時の課題・抵抗・・・

住宅金融公庫の公的融資

当時、戦後の住宅不足を解消するために創設された住宅金融公庫の方針として、

1戸建て専用住宅に融資⇒二世帯住宅は対象外

↓

世の中の動向や民間の動向に呼応してか、1980年(S55)住宅金融公庫の融資対象に

「二世帯住宅割増」が創設

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27. 矢永 晶

2. 二世帯住宅に対する社内外への発信取組 13

1980年(S55) 二世帯住宅研究所設立

親子同居と住まい方のシンポジウム 開催

- 1980年(S55)から1992年(H4)まで11回開催 (東京、大阪、名古屋、福岡、他)
- 二世帯研究所による調査報告および識者・著名人によるパネルディスカッション
- 同居に関心のある一般の方対象
- 第10回記念シンポジウムでは、2,000人収容の日比谷公会堂がほぼ満席に

第2回 1981(S56).09.12. 第10回 1990(H2).10.27.



二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27. 矢永 晶

2. 二世帯住宅に対する社内外への発信取組 14

研究所報「二重奏」発行(季刊)

- 1981年(S56)から1998年(H10)まで。3ヶ月ごと、65号まで発行
- 研究所による研究発表や識者による寄稿、二世帯住宅の実例紹介など
- お客様だけではなく、一般の同居に関心のある方、大学等の研究機関等にも配布



二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27. 矢永 晶

3. 二世帯住宅の調査研究 15

二世帯フォーラム委員会での議論を親子同居の7原則を提案

- 「選択の原則」** “長男と”ではなく誰と同居するのがお互いに幸せなのか
- 「相互尊重の原則」** お互いの価値観を持った異なる家族と認識し、それぞれの生活を尊重しあうこと
- 「自立の原則」** 経済的、精神的、身体的にお互い自立することが双方の幸せになる
- 「世帯間ルール確立の原則」** 生活の接点の部分は分帯等あらかじめ決めておくこと
- 「家族協力の原則」** トラブルが生じたときには家族全員で解決にあたること
- 「扶養分担の原則」** 同居していない兄弟姉妹も親の扶養を公平にその上で相続を
- 「社会連帯の原則」** 介護問題を一家族ではなく、社会の問題として

(1982年～1983年(S57～S58))
二世帯フォーラム委員会の様子



二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27. 矢永 晶

5. 現在感じていること 16

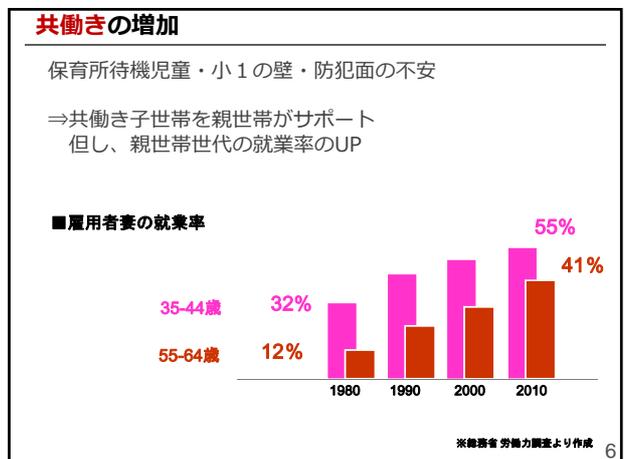
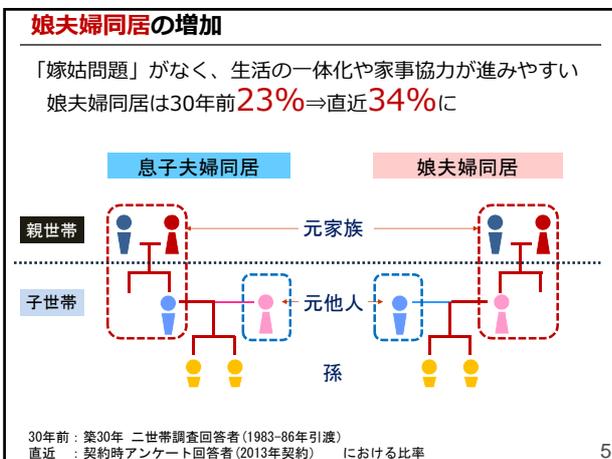
二世帯住宅の初期開発に関わった者として、現在感じていること

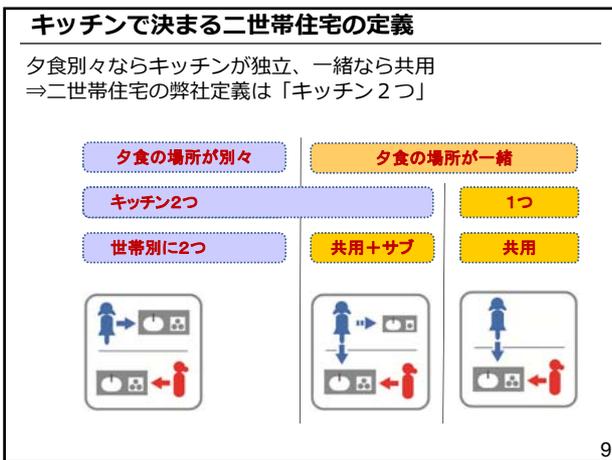
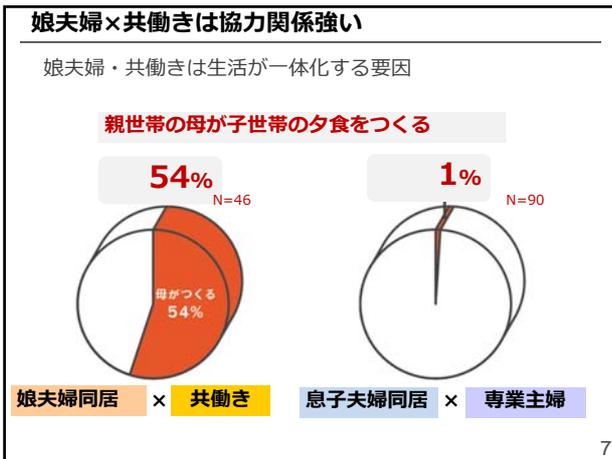
- ①二世帯住宅は
高齢社会で望ましい住宅の“型”
- ②学際的に取り組むことが大切
- ③二世帯同居には、ルールが必要
- ④世界へ目を向けることが必要

二世帯住宅 誕生前後を思い起こして 2015.10.27. 矢永 晶



1. 世帯間分離志向⇒協力志向へ
 - 夕食の別々・一緒に、キッチンのあり方を決める
 - 育児：親世帯も育児に関わる「孫共育」
 - 介護：元気なうちの加齢配慮「AICS」
2. 家族構成の多様化、家族変化への対応
 - 単身者集住：「2.5世帯住宅」
 - 空き活用：賃貸併用住宅にもなる「Rondo」
3. 同居生活者の意識：嫁姑関係回避⇒メリット追求
 - 同居のプレーキ・アクセル・コツ



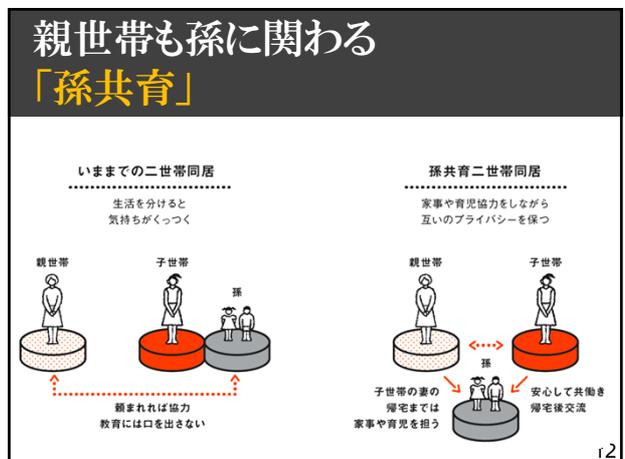
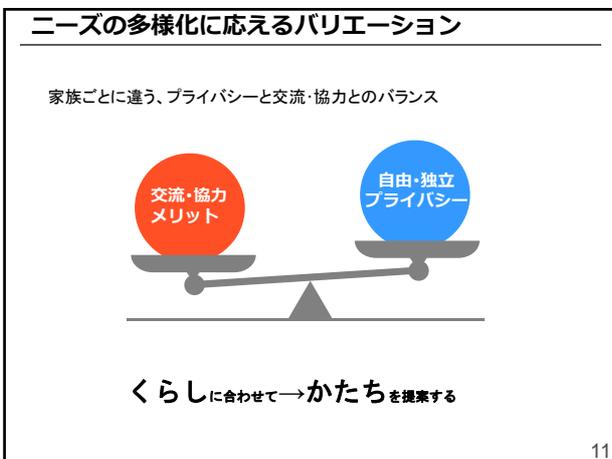


二世帯住宅のタイプ

■優先順位はキッチン、浴室、玄関の順
⇒2は1を兼ねる=世帯別通路があれば、独立二世帯でも「夕食融合」のくらしは可能

名称	独立二世帯	共用二世帯	融合二世帯	一体世帯型
キッチン	世帯別LDK	共用LDK +サブキッチン	共用LDK	共用LDK
浴室	世帯別浴室	共用浴室	共用浴室	シャワー・洗面台・洗濯機付加
玄関	世帯別玄関	共用玄関	共用玄関	専用勝手口・通用口付加
夕食スタイル 実態	夕食独立（別々の場で夕食）		夕食融合（同じ場で夕食）	

世帯別の場があっても、夕食を一緒に食べることもあり



孫共育ゾーニングとは

息子夫婦同居 = **孫共育・家事分離**
 ⇒親を子世帯LDKに入れないゾーニング

留守中も親世帯に見られない
 ⇒散らかしたまま外出ができる

孫は親世帯と子世帯の中間に
 気兼ねなく孫の部屋にいける

13

子世帯専用部分のプライバシーを守る

親世帯は子世帯LDKに立ち入らず、孫の部屋や屋上へ行ける
 ⇒孫共育ゾーニング

14

「孫の動き」を考えたプラン提案

15

築30年の二世帯で育った孫本人の評価は

祖父母と同居して
よかった

90%
 N=134

孫 → +30年 → 単身孫 孫世帯

16

外部サービスを前提にした 在宅介護への対応

同居家族と、地域包括ケア（特に訪問介護）
 の両立を考える

17

築30年調査：同居は介護にメリットあり

築30年の二世帯で
 介護経験ある子世帯 → (内)同居して
 メリットがあった

76%
 N=128

98%
 N=97

18

4つの移動ルートを優先して確保

介護用寝室を想定し、車いすの移動ルートを考えておく。
家全体ではなく、4つのルートに絞るとコンパクトに対応できる

介護用寝室

お出かけルート デイサービスとの連携 ひとりでトイレへ行ける トイレルート

ガーデンルート 自然に触れる 家族と触れ合う リビングルート

19

タタミリビングを将来介護室にする準備

トイレ・流し用配管準備

20

親思いプランニング

イマドキ親世帯の暮らしを研究した「都市の実家」

どっちもルーム

子世帯玄関

親世帯玄関

タタミリビング

2階建てモデル 1F

コックピット書斎
親世帯寝室
イマドキLDK
サブクitchen
ビッグテアブル
TVコーナー
母のコーナー

21

24時間訪問介護への配慮

- 家族が寝ている間に、訪問介護のヘルパーが来る
⇒ 訪問介護ゾーンを限定し、カギ掛けられるように
- 家族が起きているとき
⇒ 訪問介護動線が、日常生活の動線と重ならないように

動画

訪問介護ゾーン

22

2. 家族構成の多様化

親世帯は何世代、何人？

親世帯スペース総人数

1人 2人 2世代 3人 3世代 4人

親親二世帯 両親二世帯 (標準的) +0.5世帯 2.5世帯 2+0.5+0.5世帯

単身姉(妹) + 息子夫婦の組合せが多い

23

単身姉・37歳も「集居」する家

「2.5世帯住宅」

単身者を「パラサイト・シングル」ではなく
資金を出し自家建設に参加する家族と考えて提案

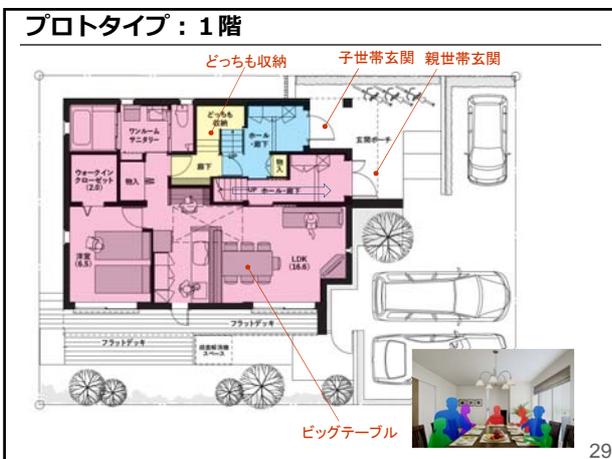
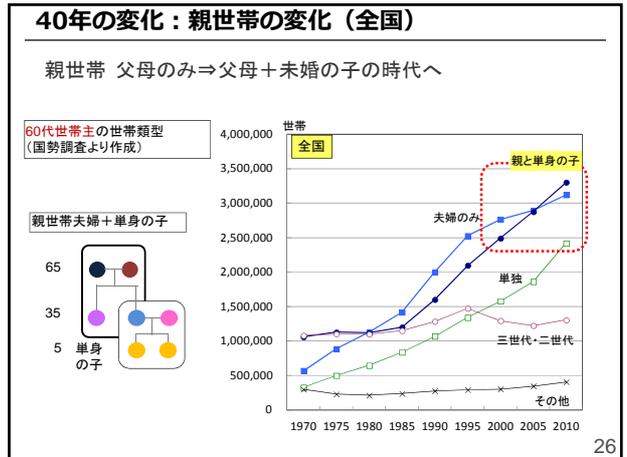
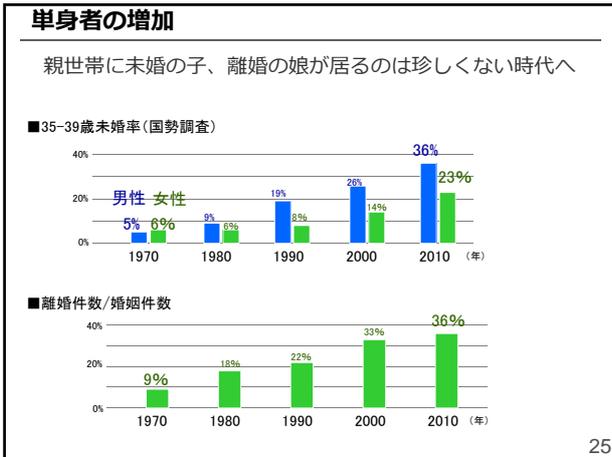
親世帯

+0.5世帯 子世帯

単身の兄弟姉妹
⇒ 姉をモデルケースとして提案

24

二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
 3. 二世帯住宅 現在までの展開



プロトタイプ：3階

川の字就寝スペース +NEST空間

子世帯LDK

31

「ロンド・コンパクト」 家族も住める賃貸部分をつくる

賃貸と二世帯の両方を考えて建てる
自宅部を残し、一部を賃貸する選択肢も

32

1階の一部分、または全部を貸せる

界壁（住戸間の耐火壁）は
新築時から2種の仕切り方を想定
アプローチも別々に

33

3. 同居生活者の意識 嫁姑問題解決⇒メリット追求

内部で行き来する二世帯住宅が主流に

34

同居のメリット=アクセセル

4つに分類

<p>日常の協力</p> <p>育児：保育園送迎 家事：子どもの食事 介護：在宅介護マネジメント</p> <p>日常</p>	<p>何かの時の協力</p> <p>留守：残業や旅行 交換：家電品購入・設定 病気：入院、通院</p> <p>非日常</p>
<p>精神面</p> <p>一人暮らしの不安解消 賑やかなイベントのある生活 防犯：空き巣リスクの減少</p>	<p>経済面</p> <p>親の土地に子世帯ローンで建設 子育て期の共働き継続 相続税土地評価8割減</p>

意識

35

同居前の不安=ブレーキ

不安の強さは、**子世帯 > 親世帯 & 女性 > 男性**

- 子世帯・妻の「嫁姑関係」が最大**
 - 「嫁姑関係は何かと気遣いが多い」不安 88%
 - 息子夫婦同居・子世帯夫：自分の母と妻の関係に不安 65%
- 親世帯母は、「協力の負担」**
 - 一番の不安は「子世帯に介護の負担をかける」娘夫婦同居母77%父61%
 - 「孫育ての負担」が不安 娘夫婦同居母64%
- 子世帯の夫は、「一人の居場所があるか」**
 - 娘夫婦同居の夫：「一人になれる場所・時間がない」が不安 64%

1507発表「息子夫婦同居・娘夫婦同居で異なる同居前不安と交流意識」
調査報告書参照

36

二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
 3. 二世帯住宅 現在までの展開

同居生活でされている配慮=コツ

⇒いかに「気を遣うか」、ではなく「**気を遣わせないか**」

基本は別々

自由に外出
頼まれたら助ける

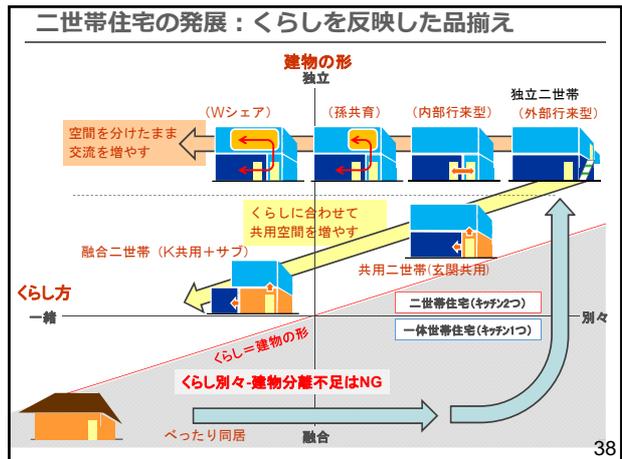
干渉しない

気付いても言わない
勝手に相手世帯に行かない

■原則として”お互い**見ざる、言わざる、聞かざる**”がいいと思う。
 そして困ったときは助け合う。(子世帯・娘夫婦・キッチン共用)

■出かけるときは、「行ってきます」「行ってらっしゃい」と声はかけ合うが、
 「どこへ行くの」とか「何時に帰るの」などは聞かない。
 (子世帯・息子夫婦・玄関のみ共用)

37



二世帯住宅建替への社会的意義

- 既存インフラ活用**
 親世帯が住み続けながら、子世帯が転入で人口増
 小学校、バス便、医院、買い物の店も維持継続可能
- 同居家族による介護マネジメント**
 同居家族がみまもりの上で、通所・訪問介護を有効活用
- 同居による環境貢献**
 新規造成の抑制・同居によるエネルギー消費の削減

エネルギー消費(4人家族を1.0として)

同居形態	エネルギー消費
別居 (親世帯2人)	1.9
別居 (子世帯4人)	1.0
同居 (夕食別々)	1.5
同居 (夕食一緒)	1.3

39

「大きな家」の持つ可能性

2015/10/27
篠原聡子

東京・ソウル・台北のスタンダードプラン



ファミリーマンションとワンルームマンション



二世帯住宅の開発

1975 (S50) 「二世帯住宅」



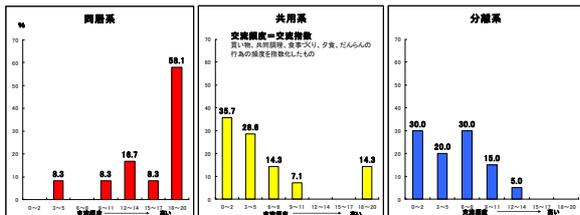
業界初の商品化

- ・発売に際して特徴が明確なこと
- ・住宅融資の点から

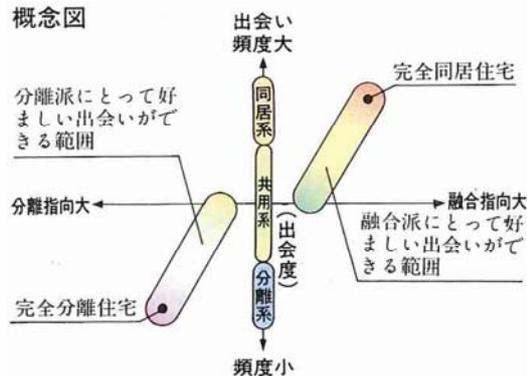


二世帯住宅の調査研究

二世帯住宅研究会 (S54) の調査でわかったこと 50軒100世帯訪問調査



二世帯住宅の調査研究



住宅の基本性能

接続と隔離

↓

接続の装置としての建築の可能性

まちとつながる ための 外をひきこむ装置
人とつながる ための 世帯を拡大する仕掛

シェアハウスとして活用される「民家」

シェアハウスとして活用される「民家」

図面削除

竣工 : 2002年
所在地 : 東京都世田谷区

総室数 : 7室
規模 : 地上2階
敷地面積 : 264㎡
建築面積 : 180㎡
延床面積 : 230㎡

シェアハウスの設計

シェアハウスの設計

敷地: 128㎡
プログラム: 単身者用賃貸住宅

↓

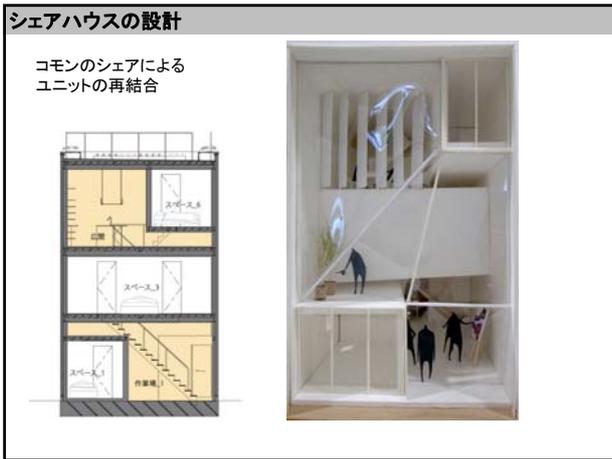
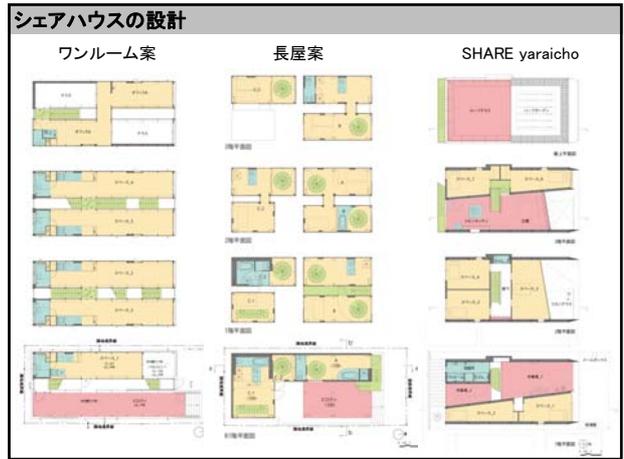
許容延床面積: 183㎡

↓

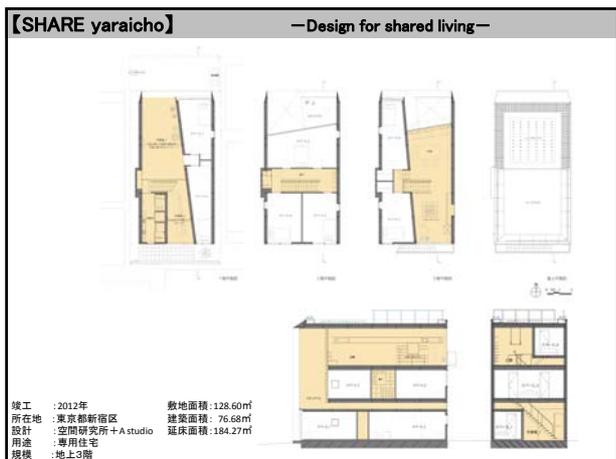
30㎡のワンルームなら6戸
25㎡のワンルームなら7戸



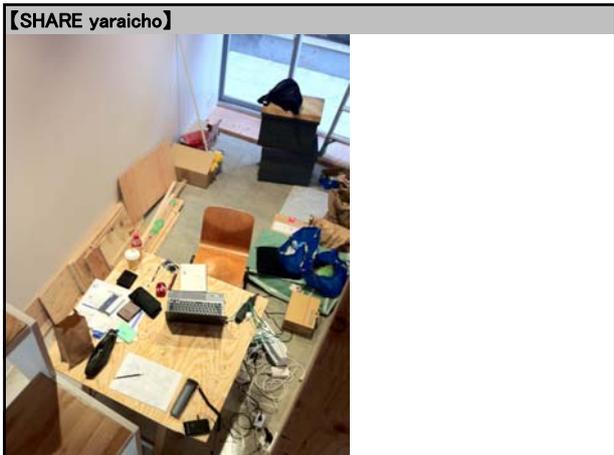
二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
4. 「大きな家」の持つ可能性



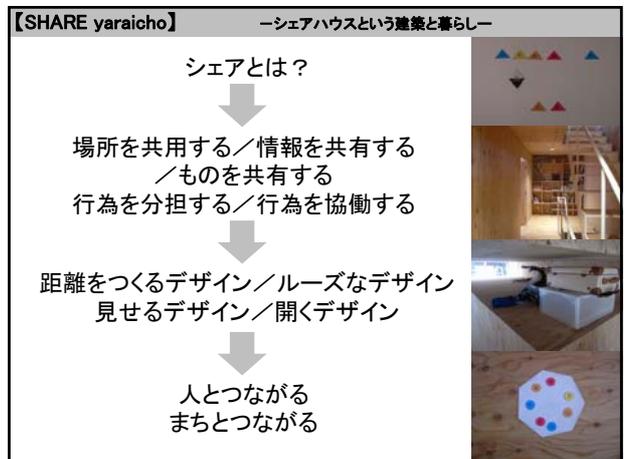
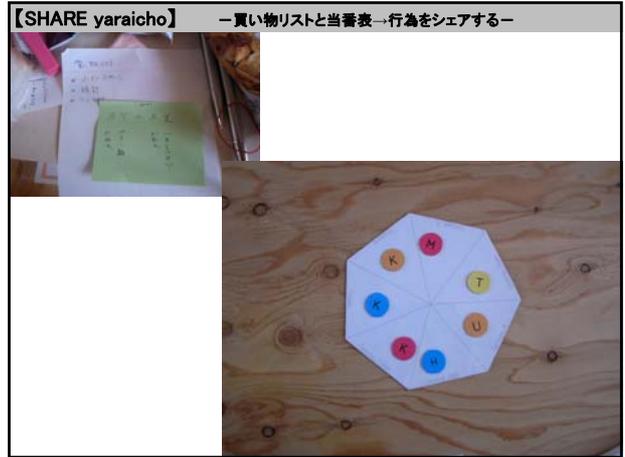
二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
4. 「大きな家」の持つ可能性



二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
4. 「大きな家」の持つ可能性



二世帯住宅40周年記念シンポジウム配布資料
4. 「大きな家」の持つ可能性



二世帯住宅とシェアハウスの共通点

二世帯住宅とシェアハウスの共通点

「二世帯住宅」 	シェアハウスとして 活用される「民家」 	7人が暮らす 「シェアハウス」 
---	---	---

人とつながる ための 世帯を拡大する仕掛

大きな家

住宅の基本性能

接続と隔離

↓

接続の装置としての建築の可能性

まちとつながる ための 外をひきこむ装置

人とつながる ための 世帯を拡大する仕掛

大きな家